

春陽会を評す (『萬朝報』 昭和七年五月二日~五日)

名は体を表す

主として傾向的考察

小松 清

巴里NRF『新仏蘭西評論』社同人

『新仏蘭西評論』(La Nouvelle Revue Française)

一九〇八年創刊のフランスの文芸雑誌。二度の世界大戦時の休刊を経て今に続く。初期は同人誌、現在は総合出版の大手ガリマール出版社が発行している。多くの作家を育てた。N.R.F.、NRF、nrfとも書かれる。

十二年振りに日本に帰つて来た私は、私の帯びる仕事の性質上、色々な展覧会に接しねばならなかつた。

私の仕事とは、来年(一九三三年・昭和八年)、巴里でもつて欧州での最も代表的な文学雑誌である『新仏蘭西評論』(NRF)の主催にかかはる現代日本美術展の予選と準備である。

大体来年度の出品は、美術院の同人によつてなされることに内定してゐるが、その為に私が、他の展覧会なり美術家の仕事に無関心になる理由は

少しもないのである。

私としては、院展の同人達が、来年の日本展の後も引続いて巴里に進出することを欲すると共に、また他の如何なる画壇に出品する作家でも、私がNRFに推薦出来る人々の作品は、真に生命を持った、現代日本美術として、縦令たとえそれが日本画であらうとも、洋画であらうとも、年としどし巴里に紹介して行き度く思つてゐるし、またやつて行く信念を持ち合はしてゐる。

去年の二科及び帝展に日本人的のものした洋画を完全に見出し得なかつた私は、独立展に中山巍君一人を見出したが、今回の春陽会にも、意味ある掘出しものをする希ねがひを密に抱いて出かけたのである。

この春陽会で、私は何を発見したか? 如何なる潮流の滑かたにぶつかつたか?

そこに同潮流はなく、春陽会の名の示すが如く、おだやかな春の沼に漂ふ陽炎の影であつたが、しかし、その沼澤ぬまさわの生温かい停滞した水を蹴つて、前途に棹さおさす勇ましい船人の姿が、無いではなかつた。

今年の春陽会の諸傾向を、先づ大体、左の通りに分類し得ると、私は思ふ。これを便宜上A、B、Cによつて列挙してみやう。

○ ○ ○

(A) 団体一般のイデオロギーと云ふよりは、趣味的傾向として社会民主主義的、印象派と呼ぶことの出来る傾向のものがある。

私の用ひる社会民主主義と云ふ言葉は、勿論政治的意味を含むものではなくて、歴史的象徴としてである。

つまり正統社会主義がソーシャル・デモクラットに変形することによつて、前者の歴史的使命を失つた様に、印象派の現代的延長が何等将来性を持たぬことを云はうとしてゐる。

この傾向に属する人々は、場内大多数を占め、主として十九世紀末フランス絵画の伝統精神なかんづくに導かれ、就中現代印象派のフランドラン、ポナール、カモアン、マルケ等の影響が大きい。シスレー、印象派時代のピサロ、セザンヌの追従もあるが、またスゴンザック風のマチエールを一層白っぽく泥々しくしたのも少なくない。

また直接、間接、滞欧時代の○氏の作品の影響も可成り働いてゐると思ふ。

○ ○ ○

(B) 印象派より他の絵画様式に移らんとする過程探索期にあつて、必然この状態が醸すディレンマに苦しみ戦つてゐる人々。

この傾向にある人は、ごく小數ではあるが、春陽会では注目してその将来しよくを囑し得る人達でなからうか。

在仏中の青山義雄氏、会員の中川一政氏がこの傾向を代表する。

(C) 印象派の洗礼を受けつつも、無意識的に印象派感情の世界より脱出せんともがいてゐる新人がある。

恐らく、この人達は彼等の仕事の推移をよく意識しないだらうけれども、壁をつき破らうとするある努力の跡が現はれる。

《塩津風景》の木下公男氏、《崖》の村上誠氏がそれである。

〔萬朝報〕 昭和七年五月二日

審美の世界

主として傾向的考察

小松 清

巴里NRF『新仏蘭西評論』社同人

(D) 純然フランス画壇の直接的、若しくは模写の傾向。

これは芸術的価値批判の対象の圏外に置かれるものである。大森商二、水谷清の諸氏が、此分類に属する。

(E) 構図的作画の傾向を持つて古典派への意図を標榜するもの。

これらの傾向は、画面的構成の原理を無視してゐるために平凡な裝飾的効果しかあげていない。

小林和作氏、小山敬三氏等が、この苦々しい失敗の経験者である。小林氏の構図と同じく、氏の出品してゐる印象派傾向の作品との関係は、この失敗の原因を証拠だてる。

(F) 印象派の歴史的教訓を受くるべく、あまりに怠惰であつたと云ふ

か、傲慢であつたと云ふか、兎に角印象派以前の陳腐な写実主義に、未だ低徊してゐる明治型洋画の残党倉田白羊氏、洋画に於ける森田恒友氏等が、

これを代表する。

幸ひにも、この類型は、この例外的存在を除いては、流石僅少である。

(G) 洋画的欧州的感觉の支配を離脱して、純然たる東洋的感性性に棹さして、伝統の呼吸に生き、心境の完成に努力し、しかも古画の模倣の観を抱かしめざる作家に小杉未醒氏(放庵)がある。

小杉氏の存在は、単に春陽会の誇りであるばかりでなく、吾が画壇の珠玉的存在である。《雲仙》《呉牛》等の大作は、技巧的、作画的才能を証拠だてるものであらうが、筆者は寧ろ小品に殆ど完成された氏の画境を見る。例へば《落雁》《暮雲》の如き、無限と人間との調和を奏でに微妙な幻想樂に、不思議に澄み切つた魅惑を感じしめる。

詩趣横溢、しかも韻律は節度を矜持して乱れず、文人画の往々にして墮する感傷的放埒に陥らず、主観的リズムの統制に硬直に流れず、実に憎らしき程の洗練された主客融和の境を啓示してゐる。

私は思ふ。日本の芸術は、日本の自然にあるのではない、日本人の審美的心理の世界にあると――。

自然は発見でない。人間によつてこそ創造されるものである。コローの風景はコロー以前に存在しなかつた様に、日本の自然は伝統の力によつて生れ培られた。

吾々は日本の自然を見る時、まず吾々の心的幻像のアプリオリ(経験に先

立つ先天性)を認めざるを得ない。

× ×

傾向の諸相を概括的に述べたが、次に私がここに挙げる作家に就いての短評を加へてこの稿を終り度い。

× ×

安宅虎雄氏は、画家としての視象統一を欠いてゐる。

裸体を前にする時はマチス流だが、自然を描く時には、凡々たる印象派に逆転するのは如何？ この種の作家は甚だ多い。

その適例を山崎省三氏に見ることが出来るし、筆者が先述したAクラスの人々か、人物、殊に肖像を描くと、この欠陥を遺憾なく暴露する。肖像を風景と同じく見やうとする所に、既に印象派の決定的な弱点がある。

自らの弱点を意識してか春陽会の出品者には、本格的な肖像画が少ない。思想する形、感動する色彩の中に内部的人間を探索しやうとする企てが殆んどない。到る処にジョルジ・サンドの自然的情詩が散歩してゐるのみだ。同じ田園趣味でも、せめてツルケネフあたりの主観をもつたものだったら、好いだけでも、そうした行き方の作家さへも少ない。

Bクラスの青山義雄氏は、氏の通つた画家的経路からしても充分注目される作家である。

印象派、古典派、浪漫派、野獸派、リリズム、更に現代印象派(ボナール)の影響を点々として通過して来た点では、流行萬歳の日本洋画壇のこの縮図であり、シンボルであるが、ただ氏に於いては、あらゆる影響を一

貫した何者かの把持を感じさせるものがある。

この点に立脚して、筆者は、氏の歸來の作品を待つ。

『萬朝報』 昭和七年五月三日

三氏の作品

主として傾向的考察

小松 清

巴里NRF『新仏蘭西評論』社同人

一言にして言へば、如何にして(青山義雄)氏が印象派の世界観から、氏本来の幻想的浪漫主義に到達し得るかの問題である。

印象派的画法が、氏の一つの有益なる経験としての技巧的意義として止まるか、それともボナールの印象派の優雅なる耽美傾向の魅惑の因となるかが吾々には興味ある。青山氏には危懼きぐに充ちた問題であらう。

しかも青山氏は他人の技巧的魅惑に少なからず感動し易い作家である故、氏としては、この点に充分の警戒を払ふべきである。

× ×

中川一政氏も異なつた形式ではあるが、青山氏と同じクリチカルモーメントにある。各自、一見すれば、落着いた絵を描いてゐる様だが、内面的には局面打開の努力なり苦悩が、ありありと見える。

中川氏も印象派的追憶と惰力に取憑かれて、折角長年来企画してゐる新興東洋画の理想境に這入ることに、少なからず困難してゐる。

氏の観念的、また技術的な難境をここに一々分析説論する紙数を持たな

いが、それは可成パッションネイトな問題を附随するものである。

ここには、ただ氏の水墨画の色彩的翻訳であつて、しかも、その色彩的表現に印象派的視覚を、猶余分に持つことに於いて、氏のデイレンマの主因を作つてゐる。

これからの中川氏にとつては、色彩的要素を墨画的感情の優越性の下において、補助的役目をなさしむるか、でなければデュフイの歩んだ路みちを踏襲しなければならぬことになるだらう。

筆者は、勿論氏が前者的行程に努力されるであらうと信ずるし、またその信じ度い。

× ×

Eクラスの範疇に属する、前記した作家以外に、大澤鉦一郎、若山為三氏の構図があるが、格段取立てて云ふべき作品ではない。

足立源一郎氏の作品などは、このクラスの最低に置かれるものであらう。『週刊朝日』なり『サンデー毎日』の表紙に格好のものであらう。氏は日本アルプスを安芝居の背景に変形する。帝都的ブルジョアイズムの安価な幸福さは、山嶽の脅威も神秘をも(私は敢へてセガンチニを説くのではないが)、シックなスキー・モードに一蹴したあの俗悪な作品を通じて、筆者は、単に足立氏の安価なエゴイズムのみならず、ブルジョアジー全体が普遍的に持つ、醜悪と傲慢に臭々たる排他的幸福主義の姿を見出すのである。之に加えて、作者の絵画的才能及び良心は、僅か一インチ四方の画面にも感ずることが出来ない。

Eクラスの白羊氏は問題外であるが、森田恒友氏の洋画は、何故氏の素描スケッチに比して拙劣なのか？

× ×

南画の作品では(別段今更感心すべき程の独自の感情ではないが)、兎に角、何処か小川芋銭氏を想わす上品にして、しかも野趣を欠かさない詩人的心境を見せる氏が何故、洋画では自然に詩を求めて、反つて死を自然に与へることともなるのだらうか？

これは、氏への宿題として残すに止まり、筆者は今後の作品に氏の回答を待たう。

小杉未醒氏に就いては、思ふところを前述した故、ここに反復しまない。

〔萬朝報〕 昭和七年五月四日

挿絵？ 版画

主として傾向的考察

小松 清

巴里NRF 『新仏蘭西評論』 社同人

次にそれ等のカテゴリーに分類